ためらいから離脱するために必要な不確実性の許容限度

— 状況別の主観的確率判断の相違 —

鈴木賢男

(文教大学人間科学部)

キーワード: ためらい, 感情, 決断

Tolerance of the Uncertainty Necessary to Leave a Hesitation

Masao SUZUKI

(Bunkyo University)

Key words: hesitation, emotion, decision

目 的

ためらい(躊躇)感情は、当惑のような状況に関する受動的な感情状態とは異なり、行動もしくは行動に及ぼす決断を抑制する能動的な感情体験となる。筆者は、最もためらいを感じた感情体験についての607名の自由記述から、この感情は、自分にとっての大切なものを失う可能性があること、更に、当該の対象(人・物・事)のみならず、それに関わる、または、そこから派生する他の大切な対象をも同時に失う可能性を予期していることを分析し、連続する喪失感が二重に重なることから、ためらいという感情状態が行動に強い抑制をかける原因となる可能性を論じた(鈴木 2008 日心発表)。上記の自由記述を再分析(未発表)した結果、予期される喪失感は、目的を果たせないであろう①失敗率(ロスト)、それに伴い自身に被害をもたらすかもしれない②危険率(リスク)、更に自己の何らかの資源を費やすかもしれない③負担率(コスト)の3つに分類することが可能と考えられ、これらを喪失する予期が、二重三重に重層することから、ためらい感情が生ずるものと考えた。筆者は、対象者の属性(抑制的信念)がためらい感情の強さに影響する可能性を示唆してきた(2009・2010 日心発表)が、本研究では、状況における不確実な失敗率や危険率、負担率がどの程度ならためらい感情を緩和し、行動もしくは行動への意志決定がなされるのか、その許容できる確率値を主観的に判断させて、状況別の差異を比較することを目的とした。

方 法

質問紙調査実施日: 2012 年 4 月。対象者: X 大学の大学生 44 名(男性 28 名, 女性 16 名)。平均年令 18.2 才(SD=0.48)。ためらいに対する意識: ためらいを実際に経験してきたうえでの“ためらい”に対する意識(例: ためらった場合には無理に決断しない。ためらうことが多い)に関する計 10 項目に対して、自己評定法により「非常にそう思う—全く思わない」までの 5 段階で評定していただいた。不確実性の許容限度: 1. 相当に手にしたいものがあるとき、2. 是非にと人から勧められているものがあるとき、3. 必要なものを手にしなければいけないときの 3 つの状況で、実行への決断を促すために許容できる A 成功率(失敗しない可能性)、B 危険率(リスクを伴う危険度)、C 負担率(コストを費やす負担度)を 0 ~100%の間を 5%ずつに区分してスケールとして提示し、選択していただいた。更なる離脱手段: それでも、ためらいの感情から離脱できない場合にとる手段(例: 友人の意見を聞く、雑誌の占いをみる)に関する 19 項目に対して、自己評定法により「大変当てはまる—全く当てはまらない」までの 5 段階で評定していただいた。質問紙手続き: 質問は Web フォームで作成され、パソコン教室で教示後、インターネットを通じて、その場で回答・収集させていただいた。

結 果 と 考 察

ためらいに対する意識構造: 全 10 項目に対して、最尤法による因子分析を実施し、固有値 1.0 以上を基準として 4 因子を抽出したのち、回転バリマックス解を得た(累積寄与率 46.0%)。単純解として、ためらいを続けてしまう「逡巡」、ためらいを好ましく思わない「評価」、ためらいを拒絶する「回避」、状況を冷静に分析しようとする「確認」の 4 つの因子として分類することができた。それぞれの因子を構成している項目の合成得点を算出し、これを項目数で割ったものを尺度得点とした。各々の平均値は、逡巡 3.5、回避 3.4、評価と確認は 3.0 となった。尺度得点間のピアソンの相関係数は、いずれも低く 5%水準で有意となるものはなかった。不確実性の許容限度: 1.相当に手にしたい状況における平均許容限度は、A 成功率が 59.4 (SD=24.2)、B 危険率は 42.2 (22.0)、C 負担率は 66.1 (20.5) であった。2.是非にと人から勧められる状況における平均許容限度は、A が 75.6 (19.4)、B は 26.7 (20.8)、C は 43.8 (24.8) であった。3.必要なものを手にしなければいけない状況においては、A が 74.4 (21.0)、B は 39.2 (22.4)、C は 48.0 (21.0) となった。対応のある t 検定を行い、5%水準で有意差が認められた対を確認した結果、1.A の成功率の許容限度が 2.A と 3.A よりも低くなっていること、1.C の負担率の許容限度が 2.C と 3.C よりも高くなっていることがわかった。2.B の危険率の許容限度が 1.B と 3.B よりも高くなっていることがわかった。更なる離脱手段: 共通性の比較的低かった 4 項目を除いて、最尤法による因子分析を行い、固有値 1.0 以上を基準として 5 因子を抽出したのち回転バリマックス解を得た(累積寄与率 66.0%)。単純解は占いや縁起をみる「縁起」、理想的なモデルにならう「疑似」、自己を高揚させる「啓発」、身近な人に相談する「助言」、一般的な法規や倫理に合わせる「規範」の 5 因子として分類できた。因子を構成する項目の合成得点を項目数で割った数値を尺度得点とした結果、更なる離脱手段として、助言の平均値が 4.0 (SD=1.02) と最も高く、啓発や規範は同程度に高く、疑似が 2.5 (0.82)、縁起の平均値が 1.8 (0.90) と最も低かった。逡巡・確認傾向と許容限度との関連: 逡巡と確認傾向の上位群と下位群に分け、これらを固定要因とする 2 要因の分散分析を行ったところ、1.相当に手にしたい状況における A 成功率は、確認傾向の高いものほど許容限度を高くする主効果が一応認められた ($P<.10$) が、2.是非にと人から勧められている状況における A 成功率は、確認傾向と逡巡傾向がともに高いと許容限度を低くし、確認傾向と逡巡傾向がともに低いと許容限度を高くするという交互作用を確認することができた ($P<.05$)。2.の状況では 1.とは異なり、状況に他者の存在の関与(勧める)があることによって、許容限度のとらえ方に影響を及ぼすことが考えられた。